

連載 プロマネの現場から

第 129 回 中国企業の海外進出「走出去」

蒼海憲治（大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監）

昨年は、「日中平和友好条約締結 40 周年」の節目の年でした。締結日の 8 月 12 日は、領事館などを除くと、あまり目立ったイベントもなく、少し寂しい気持ちがありました。昨年 10 月末に安倍首相が、日本の首相として 7 年ぶりに中国を公式訪問し、日中関係の関係改善ムードが高まりました。長年続けていた ODA 終了とともに、日中両国が協力して世界の諸国へ支援する、日中関係の新段階へ移行することが表明されました。それは、中国政府の提唱するシルクロード経済圏構想「一带一路」への参画にもつながります。

長年続いた日本から中国への ODA が象徴するように、中国は、世界各国からの外資を利用して経済成長を続けてきました。しかし、その状況がこの 10 年で大きく変わってきています。

2015 年、中国からの対外投資額が、初めて中国への外資導入額を超えました。そして、2016 年には、中国の単年度での対外投資額が、1961.5 億ドルに達し、オランダ・日本を抜き、米国に次いで世界第二位となっています。

ただし、2017 年は、2016 年に比べて 19.3% 減の 1582.9 億ドルと、2003 年以来初の減少となりましたが、規模は、依然、米国に次いで 2 位になっています。双方向投資でみても、中国の対外直接投資フローは 3 年連続で外資導入額を上回っています。

中国の対外直接投資については、これまで特段の規制がない中、中国企業の海外事業展開に伴う損失やプロジェクト失敗が発生していました。そのため、2018 年 3 月 1 日施行の「企業海外投資管理弁法」が規定されました。これまで、政府も推進一辺倒の姿勢でしたが、今後は、高リスク案件の抑制や投資リスクの適切な管理に軸足を移したとみることができます。

2017 年の対外投資額の内容ですが、対外投資・M&A の分野はこれまで以上に広がっています。案件として 431 件、56 カ国・地域にわたり、取引額は実行ベースで 1196.2 億ドルとなっています。

その中でも、中国の IT 業界の投資状況をみてみます。

BAT と呼ばれる「百度、アリババ、テンセント」の 3 社の投資は活発で、中国国内のベンチャー企業を中心に、合計 194 社に投資しています。

3 社ともに共通するのは、AI・人工知能分野と新しい自動車分野である EV、コネクテッドカー、自動運転などへの投資になっていることです。

テンセント：

投資対象企業は、113社と最も多く、投資先も多岐にわたっています。

テンセントの本業はゲームや娯楽分野であるため、投資対象企業も、アニメ、映画、エンタメなどのコンテンツ制作を行うエンターテインメント分野の企業が28社、ゲーム企業7社を占めています。ただし、その他の投資企業の中には、特に海外企業の中には、とても興味深いものがあります。

たとえば、インドのEコマース企業Flipkartに対しては14億USD(1540億円規模)の投資、同じくインドの配車アプリサービスのOLAに対しては20億USD(2200億円規模)を投資しています。また、インドネシアのベンチャー企業であるGo-Jekに対しても12億USD(1320億円規模)を投資しています。テンセントが、インドとインドネシアを最重要投資拠点としていることがわかります。その他、アメリカ企業、カナダ、オーストラリア、イギリス、ドイツ、タイ企業などにも積極的に投資を行っています。

アリババ：

投資対象企業数は45と、テンセントの半分以下ですが、5つの新産業「Five New」戦略に基づいた重点分野へのベンチャー投資を実行しています。

すなわち、ニューリテール（新しい小売）、ニューマニュファクチャー（新しい製造業）、ニューファイナンス（新しい金融）、ニューエネルギー（新しいエネルギー）、ニューテクノロジー（新しいテクノロジー）の5つであり、その中でも、ニューリテールとニューエネルギー分野である新自動車分野への投資が活発になっています。

海外投資としては、東南アジア最大のeコマース・プラットフォームであるLANAZAを買収するとともに、インドのPaytm eコマース、インドネシア最大のオンラインマーケットプレイスのトコペディアに出資しています。

百度(Baidu)：

百度は、他の2社以上に、人工知能分野と新自動車産業への投資に集中しています。

現在、百度が推し進めている自動運転車実現計画である「アポロ計画」実現に向けた投資とみることができます。

BAT以外にも、深圳のスマホ企業であるTrassion（伝音）は、先行していたサムソンを抜き、アフリカの携帯市場を制覇しています。また、Huaweiのスマホは、中東の携帯市場で、アップルを抜き、サムソンに次ぐ2位になっています。

ところで、「一带一路」は計画段階から実施段階になりつつありますが、中国企業の海外進出は、大きく3つの段階で成長してきています。

中国政府が積極的に支持している海外の投資戦略を表す言葉は、「走出去（ゾウチュチュ）」といいますが、その中は、「走出去（ゾウチュチュ）」「走進去（ゾウジンチュ）」「走上去（ゾウシャンチュ）」の3つの段階に分かれています。

「走出去（ゾウチュチュ）」の段階では、技術の習得、技術レベルの向上を目的としていました。

中国の低コストと豊富な労働力を武器にし、外国企業から資本を集め、OEM（original equipment manufacturer）で製品を開発する中で、技術力を向上させました。

続いての段階が、「走進去（ゾウジンチュ）」であり、マネジメント力の向上を目的としました。中国の資金力を武器に、外国企業の買収などを通し、OBM（original brand manufacturer）として、自社ブランドとして勝負するようになっていきます。

10年前に、中国のGDPが日本を抜いたといわれた当時、中国企業で世界のブランドとして認知されていた企業はほとんどなかったのですが、2016年時点では、ブランドトップ500社の中で、米国227社、日本37社対して、中国は36社と並ぶまでになっています。

そして、現在、「走上去（ゾウシャンチュ）」の段階にあります。研究開発とイノベーション力の向上が目的としています。OSM（original strategy manufacturer）として、世界のリーダーを目指しています。

私たちの中国でのソフトウェアビジネスも、当初は、日本からのオフショア開発からスタートしましたが、現在、中国市場における自社ソリューションの開発・提供段階にあり、これからは東南アジアから欧米・日本へのリバース・イノベーションが求められています。

「走出去（ゾウチュチュ）」「走進去（ゾウジンチュ）」「走上去（ゾウシャンチュ）」の流れと一致しており、この流れは今後ますます加速していくと思います。現在、この流れに沿う取り組みが求められています。

<参考資料>

<https://glotechrends.com/2017-bat-investments-180119/>

2017年の中国巨大IT企業（BAT3社）のベンチャー投資状況 まとめ 総論編
01/19/2018 nobbyconsulting

<https://glotechrends.com/2017-tencent-investment-180124/>

2017年の中国巨大IT企業（BAT3社）のベンチャー投資状況 まとめ 各論編 第1回【 Tencent】
01/24/2018 nobbyconsulting